

現代日本語「天国（てんごく）」の出自から定着まで

加藤 早苗

キーワード：天国 近代和訳聖書 馬太傳 類義語 語意変化

1 はじめに

仏教語に比べ十分の一の歴史も経ていないキリスト教術語が日本の思想、文化に及ぼした影響は多大であり、特に未曾有の変化過程にあった明治・近代において、ことばの定着は思想の定着を促した。しかし、定着した概念は歴史とともに変化をし、ことばの意義にもまた変化が生ずる。

「天国」という語が宗教用語であることは誰もが知っているが、現在では「天国」という言葉を宗教的な意味で用いることの方が少なく、歩行者天国、映画天国、子供天国などと、規制がなく自由で楽しいというイメージを与えることを目的として「天国」を付加して用いることが多い。

大正12年(1923)に刊行された『字源』^(注1)には、

【天国】天上のくに。耶蘇教にて罪を贖はれし人の靈魂が死後に行くといふ。

天上界=天堂。

と解説されているが、昭和64年(1989)刊行『現代国語辞典』^(注2)では次のようになっている。

【天国】①[キリスト教で]天上にあるという苦しみも悩みもない清らかな理想的な世界。

(類) 楽園・極楽・パラダイス

②思うとおりにでき、楽しくすごせるところ。「歩行者一」(対) 地獄

『字源』に説明されている「罪を贖はれし人の靈魂が死後に行く」というキリスト教本来の意味が削除され「苦しみも悩みもない清らかな理想的な世界」という解説が加わり、さらに、②「思うとおりにでき、楽しくすごせるところ」という項目が立てられている。類義語も「天上界・天堂」から「楽園・極楽・パラダイス」に変化している。

「天国」は明治の初期、聖書と訳が行われた際の訳語であるといわれているが、上記のごとく大正から昭和という短期間において語義に変化が現われている。本稿では「天国」という言葉の出自から定着までを語意変化の経緯に焦点をあてつつ、文献や新聞などの検証を通して考察を試みる。

2 日本における「天国」の出自

孫(2004)は、「天国」という言葉は、中国において聖書の漢訳によって生まれ日本語に和訳される時にそのまま受け入れられたものであると述べている。^(注3)

日本において最初に出版された主な聖書は、1872年ヘボン・ブラウン訳『新約聖書馬可傳』『新約聖書約翰傳』、1873年『新約聖書馬太傳』(以下ヘボン訳「馬太傳」という)の各福音書である。ギリシャ原書「*βασιλεία τῶν οὐρανῶν*」^(注4)、ジェームズ欽定訳「kingdom of heaven」^(注5)と記されている箇所が、ヘボン訳「馬太傳」において「天国」と訳出されている。^(注6)『ブラウン書簡集』には、次のように述べられている。^(注7)

中国で議論して分裂を生じたりした一つの問題(神の訳語を中心としたいわゆる Term question)は、日本にいる私たちの間では、すでに解決しているのです。

「神」の用語は議論されていません。Godの日本語は「かみ」、これに対する中国語は「神」^{しん}です。ですから、その難問は、私たちから取り除かれたわけです。

このように、「神」「聖霊」「聖書」「主」などの基本訳語とともに「天国」という言葉も漢訳聖書から継承されたと思われる。

日本における「天国」の出自を辞書ならびに書物から検証してみよう。

2.1 対訳辞書における「天国」

ヘボンによる『和英語林集成』^(注8)和英の部において「天国」に関連する箇所を比較対照してみると次のようである。

『和英語林集成』(1867)初版 ヘボン著

【TEN-DŌ】テンダウ、天堂、n. Paradise、heaven、a Budd. Word. -ni umareru、To enter paradise. Syn. GOKURAKU、JŌDO.

『和英語林集成』(1872)再版 ヘボン著

【TEN-DŌ】テンダウ、天堂、n. The heavenly temple、Paradise、heaven、a Budd. Word. -ni umareru、to enter paradise. Syn. GOKURAKU、JŌDO.

『和英語林集成』(1886)三版 ヘボン著

【TEN-DŌ】テンダウ、天堂、n. The heavenly temple、Paradise、heaven、(a Budd. Word): -ni umareru、to enter paradise. Syn. GOKURAKU、JŌDO.

【TENKOKU】テンコク 天国 n. The kingdom of heaven(chr.).

「天国」という言葉がヘボン訳「馬太傳」完成後の三版において新たに立項されている。初版、再版では Paradise、heavenの和訳が「天堂」となっており、類義語として

「極楽」「浄土」が挙げられている。英和の部では、「Heaven」の出頭語は「天」であり、「Paradise」の出頭語は「極楽」である。そして、どちらにも「天堂」「浄土」が含まれ、「Paradise」の3版に「楽園」が加えられている。「Kingdom」の出頭語は初版、再版では「国」であるが、3版では「王国」になっている。

他の対訳辞書を調べてみると以下のようなものである。

『英和双解字典』（1886）棚橋一郎訳

【Heaven】天、青天、上天、天堂、太虚、天帝、大幸。

【Kingdom】国、王国、君主国、王民、部類、土地、上帝の国、政權、天、政治。

『和訳字彙』（1888）棚橋一郎訳

【Heaven】天、青天、天帝、大幸。 kingdom of heaven 天国。

『附音挿図 和訳英字彙』（1888）島田豊纂訳

【Heaven】天、大気、神ノ存ス処、太虚、天堂、天国、天帝、上帝。

【Kingdom】王タル、王權、政權、王国、王領、君主国、天国。

『明治英和字典』（1889）尺振八訳

【Heaven】天、青空、空気、神ノ在ル所、天国、天帝、至福、洪福。

【Kingdom】国王タル、王權、王者の国、国、界、部、門。

『双解英和大辞典』（1892）島田豊纂訳

【Heaven】天、青空、太虚、大気、天堂、天国、極楽、皇天、天帝、上帝、至福。

【Kingdom】王タル、王權、立君国、王国、王領、君主国、界、部、門。

明治初期の対訳辞書では「天国」という言葉は「Heaven」の項に現れたり「Kingdom」の項に現れたり揺れがみられる。対訳辞書における「天国」(kingdom of heaven)の初出は『和英語林集成』（1886）三版であり、続いて『和訳字彙』（1888）に「kingdom of heaven 天国」と解説されている。

2.2 国語辞書における「天国」

明治期に刊行された国語辞書において「天国」の項が立項されたのは、『ことばの泉』（1898）である。類義語として「天堂」「浄土」「極楽」も併せて紹介する。

『言海』（1889）大槻文彦

【天国】項なし

【天堂】耶蘇教ノ極楽浄土。

【浄土】佛経ニ佛、在シテ、三毒五濁の業ナキ世界。極楽園。（極楽の條、見合ハス

ベシ)

【極楽】佛説ニ、佛果ヲ得タル亡者ノ行クトスル世界、西方十万億佛土ニアリトイフ。

又、浄土。九品浄域。(浄土の條、見合ハスベシ)

『日本大辞書』(1892-93) 山田美妙

【天国】項なし

【天堂】漢語。耶蘇教デ、極楽世界。

【浄土】漢語。佛教ノ語。佛ガ居テ、スベテ悪事ノナイ無垢の世界＝極楽園。

【極楽】一、佛教ノ語。ヨク佛果ヲ得タ亡者ガ行ク世界。西方十万億佛土ニアリ、諸事円満具足シ、愉快此上モ無イ快樂ノ土地トイフ。＝九品浄域、＝浄土。

二、(転ジテ) 快樂デアルコト。

『帝国大辞典』(1896) 藤井乙男他

【天国】項なし

【天堂】耶蘇教にて、極楽世界をいふ。

【浄土】佛教の語なり、佛の居て、すべて悪事のなき無垢の世界といふ意なり、極楽国をいふ。

【極楽】一、佛教の語にして、よく佛果を得たる亡者の行く世界といふ、想像世界なり、西方十万億土にあり、諸事円満具足し、愉快此上もなき快樂の土地なりといふ。九品浄域、浄土などいふにおなじ。

二、転じて、快樂なるをいふ。

『ことばの泉』(1898) 落合直文

【天国】耶蘇教にて、人の死にて後、靈魂のゆくといふ天上のよきところ。佛教の極楽浄土の類。

【天堂】耶蘇教の語。極楽世界の称。

【浄土】佛教の語。佛のいます国。悪事といふものなく、全く無垢の世界なりといふ。
なほ、ごくらくを見よ。

【極楽】一、極めて楽しきこと。

二、佛教の語。佛の住む世界。西方十万億度にありて、諸事円満し、快樂きはまりなしといふところ。浄土。

「天国」の立項のない『言海』『日本大辞書』『帝国大辞典』では「天堂」を「耶蘇教の語」として扱っている。また『ことばの泉』においても「天国」「天堂」共に「耶蘇教の語」として説明している。「天国」の類義語として「天堂」「浄土」「極楽」の3つ

の言葉を取り上げ、明治以前の文献を検証したところ、以下のように「天堂」は古くから耶蘇教の語としてではなく仏教の語として用いられている。

『性靈集』(1079) (日本古典文学大系)

「天堂仏閣人間殿、似有還无与此同」

『正法眼蔵』(1231-53) 随聞記

「安楽・兜率といふは、浄土・天堂、ともに輪廻することの同般なるとなり」

『私聚百因縁集』(1257)

「自得して善は天堂に至り悪者獄に入る」

『米沢本沙石集』(1283) (新日本古典文学大系)

「不知足の者は天堂に処といへども心になはず」

「天堂」の語義が佛語から基語へと変化が生じたのは、中国において「天堂」と「天国」が同義語として捉えられており、その影響を受けたため、また、対訳辞書に現れたように新しい語の出現により語義の明解な把握が行われていなかったためであろうと推測する。

2.3 明治期以前の「天国」と類義語

「天国」「天堂」「浄土」「極楽」の4つの言葉を取り上げ検証したところ、中古から近世(江戸時代)に至るまでに「天国」という語は管見できなかった。

『邦訳日葡辞書』^(注9)では【Iodo】(浄土)の項の解説に「天国」という言葉が使われているが、

『邦訳日葡辞書』

【Iodo】(浄土)

Qiyoi cuni (浄い国) 清浄な国、すなわち、仏 (Fotoque) のパライソ (Paraiso 天国)

これは、長崎イエズス会学院から1603年に出版された『日葡辞書』を土井忠生、森田武、長南実、各氏により編訳されたもので、後に付記されたものであると解説されている。^(注10)

日葡辞書の説明を補足し読者の理解を助けるためには、特に注記を加える方策を講じた。例えば、教会用語や文法用語など当時運用の特殊語は原語のままなり訳語なりを挙げて、それに相当する現代語を付記した。

また、同時期に刊行されたキリシタン宗教文学といわれる『どちりなきりしたん』、

邦訳宗教文学『スピリツアル修行』『こんてむつすむん地』などには「天の国」「パライズ」 という語がみられる。

『どちりなきりしたん』(1600長崎刊行カサテナ文庫国字本)^(注11)

「天にパライズをさだめ玉ふによて也。」 p30

『スピリツアル修行』(1607長崎コレジョ刊行 ローマ字本)^(注12)

「汝達我と共にテナタサンに堪忍し届けらるるによって、天の国をデウス パアデレ 我に任せ給ふ如く、我また汝達に任すなり。」 p162

「天の国を願ひ[て]頼母しく思ふ人なり。」 p174

『こんてむつすむん地』(1610京都刊行天理図書館国字本)^(注13)

「いとひて天のくににいたらんところざす事、さいじやうのちゑなり。」 p200

「しかるときんば、てんのくにゝいたる」 p287

「天のみくにをたづぬる者、いかにもすくなかりし者也」 p320

『スピリツアル修行』の目録「年中のドミンゴのメヂタサン」は新約聖書からの引用が多い箇所、その中からマタイ伝引用箇所を翻訳委員社中訳『新約全書』(1880)と対照してみると次のようである。 (ス)スピリツアル修行、(全)新約全書

- ① (ス)「エワンゼリヨの字面は天の国となるエケレジャは、あるパアテル ハミリヤ ス その身の葡萄の畑に農夫を傭はるるに、人によっては早く来り、」 p263
(全)「それ天国は朝はやく出て葡萄園に工人を雇ふ主人の如し」 20.1
- ② (ス)「天の国に喩ゆるエケレジャは 農夫の耕作をなすに似たり。」 p265
(全)「天国の教を聞て悟らざれば悪鬼きたりて其心に捲れたる種を奪ふ」 13.19
- ③ (ス)「エワンゼリヨの字面は天の国となるエケレジャは、夥しき晩炊を」 p294
(全)「天国は或王その子の為に婚筵を設るが如し」 22.2
- ④ (ス)「キリシタンの善はハリセヨのに勝らずんば、天の国へ至るべからず、」 p299
(全)「パリサイ人の義よりも爾曹の義こと勝ずば必ず天国に入ること能じ」 5.20
- ⑤ (ス)「如何に御主御主と呼びたりと雖も天の国へは入れ給はざりしとなり」 p303
(全)「我を召て主よ主よと曰もの蓋く天国に入に非ず」 7.21

「年中のドミンゴのメヂタサン」では「天国」ではなく「天の国」と訳出されている。なお、教外文学『天草版 平家物語』『伊曾保物語』では「天の国」「パライズ」の語は用いられておらず、「浄土」「極楽」「天」が使用されている。

なお、古代から「天堂」「浄土」は仏教典籍、「極楽」は和歌集、物語に多く現れており、文献を管見する限りでは「天堂」は耶蘇教の語でなく仏教の語として用いられていた。

以上、近代和訳聖書、対訳辞書、国語辞書、文献等の調査の結果、「天国（てんごく）」という語をみつけることができたのは1873年へボン訳『新約聖書馬太傳』ということになる。（それ以前の「天国」の用例をお知りの方は教えてください。）

3 聖書における「天国」

3.1 漢訳聖書の変遷と「天国」

中国ではイエズス会により1750年より聖書の中国語翻訳が開始されていたが、1843年南京条約によって香港など6港が開港されたことにより宣教活動が開始され、1852年に新約聖書代表訳（文理訳）初版が発行された。当時のロンドン伝道会・アメリカ外国宣教会・米国バプテスト伝道会等の協議の結果「θεός」を「神」と訳すか「上帝」と訳すかは訳者の自由とするとの決定から、米国聖書協会は「神」を、英国聖書協会は「上帝」を採用した。

この後、ブリッジマン・カルバートソン訳、文理和合訳本、浅文理訳、国語訳、国語和合訳と改訳発行が続き、現在最も広く頒布されているものが「和合本」と呼ばれる国語和合訳であるが、「神」と「上帝」の統一はなされないまま聖書協会に委ねられている。

「天国」という言葉も最初は定まっておらず、1813年モリソン訳『馬竇書』で「kingdom of heaven」に対する漢訳を拾い出すと「天之国」18例、「天国」7例、「天之王」4例、「天王」2例、「神之王」1例、「国」1例、「王」1例、となっており、「kingdom」の訳が「国」と「王」の両方に訳されている^(注14)。しかし、その後1863年ブリッジマン、カルバートソン訳『新約全書』ではすべてが「天国」と訳されている^(注15)。そして、日本においても明治初期の聖書では「kingdom of heaven」は漢訳聖書と同じく「天国」という言葉が用いられている。2章「日本における「天国」の出自」で述べたように、「神」などの用語とともに「天国」も漢訳から継承されたと考える。

3.2 和訳聖書の変遷と「天国」

1871年、独自の訳業を進めていたゴープルにより『摩太福音書』がへボン訳聖書に先駆けて刊行された。へボンらの文語体に対し、ゴープルは口語に近い平仮名書きで訳出し、「天国」ではなく「てんのごせいじ（天の御政事）」と邦訳している^(注16)。

1874年「翻訳委員社中」（プロテスタント）による事業が開始され、訳了しだい分冊

が出版された（以下「社中分冊」という）。1880年に『新約全書』（以下「社中全書」という）、1887年に旧約の訳業が完了し、1888年に文語訳といわれる「明治訳聖書」が発行された。その後、改訳がなされ1917年に「大正訳」が出版された。現在発行の文語訳は旧約が明治訳、新約がこの大正訳といわれるものである。

昭和戦後、当用漢字及びかなづかいの変化により、日本人聖書学者と米英聖書協会による「口語訳」が1955年に出版され、1987年の新共同訳が出版されるまでの32年間に亘り使用された。

1968年、聖書協会世界連盟にローマカトリック教会が参加し、プロテスタントとカトリックによる同一聖書使用の協議が成立し、日本では1970年に共同訳聖書実行委員会により聖書の改訳が進められた。よりわかりやすい聖書を目標に、改訳に18年の歳月をかけ1987年「新共同訳」が完成した。

ヘボン訳、社中分冊、社中全書、大正訳、口語訳と約百年間用いられていた「天国」という言葉が、1987年の新共同訳で「天の国」と改訳された。^(注17)より原書に忠実なものをとの目的により1963年福音派によって出版された日本聖書刊行『新改訳聖書』でも「天の御国」と改訳されており、^(注18)現行の『聖書』（新共同訳、新改訳）から「天国」という言葉はなくなった。

4 「天国」の定着と変化

「天国」の定着を検証するため、新聞及び文学作品、辞書を用いて、類義語である「天堂」「極楽」「浄土」と「天国」の出度数比較をする。また、語義の変化の様子を定着の過程及び用法から分析し考察を試みる。

4.1 調査対象

調査対象は新聞を読売新聞朝刊、調査期間は明治から昭和戦前（1875年から1945年）までの71年間とする。^(注19)

書籍は明治期を『新潮文庫 明治の文豪』^(注20)に収録されている51の文学作品に『当世書生气質』、『露団々』、『和蘭皿』、『口語のため』を加えた55の作品、大正期は『新潮文庫 大正の文豪』^(注21)に収録されている53の文学作品、昭和期を『新潮文庫 100選』^(注22)から62の作品を対象とする。なお、小品や詩の数は数えず、代表作に含む。

4.2 明治期における「天国」

「天国」「極楽」「浄土」「天堂」の出度数を明治、大正、昭和戦前にまとめると（表1）

のようになる。ただし、天国（あまくに・刀剣名）、梵天国、寺院名、宗派名は除く。また、「極楽浄土」は「極楽」に分類し、「極楽往生」「地獄極楽」「恋愛天国」「健康天国」などの複合語も数に入れる。

「天国」及び類義語の出度数一覧（読売新聞朝刊）

| | 明治時代 | 大正時代 | 昭和戦前 |
|----|---------|---------|-----------|
| 天堂 | 0 | 1 | 0 |
| 浄土 | 11 (7) | 22 (20) | 148 (103) |
| 極楽 | 39 (17) | 38 (16) | 82 (44) |
| 天国 | 1 | 66 (2) | 301 (147) |

(表1) ()内の数字は複合語数を表す。

「天国」の用例数は明治時代には1例のみであるが、大正時代に入ると「極楽」を上回り、昭和では「極楽」の使用数の4倍近くに急増している。「天堂」は大正時代に1例みられるだけである。なお、明治時代の「天国」の1例は1893年（明治26）7月18日のシアトル発刊の記事であり、国内での記事には「天国」の語はまだ使用されていない。明治期の文学作品での用例数をまとめると（表2）のようである。

「天国」及び類義語の用例数一覧（文学作品）

| | 明治期 | 大正期 | 昭和期 |
|----|--------|---------|---------|
| 天堂 | 3 | 1 | 0 |
| 浄土 | 4 | 14 | 5 (2) |
| 極楽 | 13 (7) | 50 (10) | 46 (18) |
| 天国 | 13 | 36 | 37 |

(表2) ()内の数字は複合語数を表す。

文学作品では明治期から「天国」の使用例は「極楽」と同数を数え、「御神の恵み」「浄罪界」などの言葉とともに宗教用語として使用されているだけでなく、「極楽」と同じように、苦勞のないすばらしい所の喩え、また、「地獄」の対義語としても使用されている。

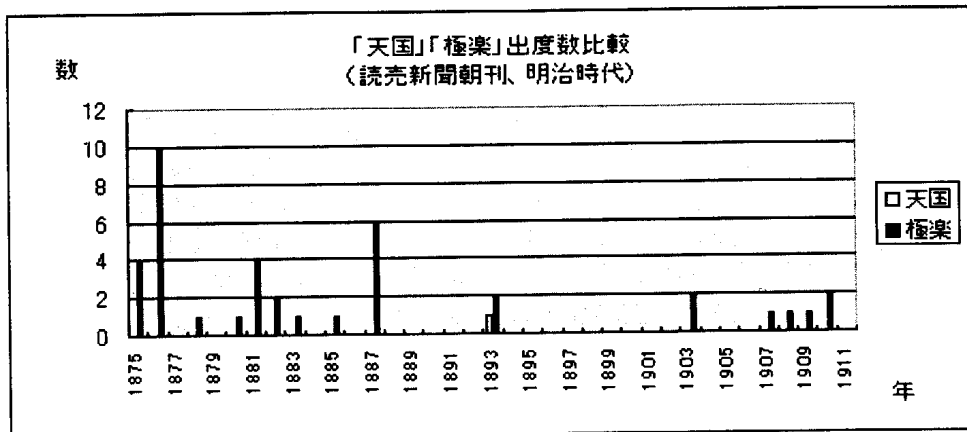
「天国」の用例

- ①「御神の恵に助けられて、導かれし天国の」『金色夜叉』（1902）尾崎紅葉P199
- ②「この浄罪界に足を入れたものでなければ決して天国へは登れまいと思うのです。」
『野分』（1907）夏目漱石P189
- ③「逆しまに天国を辞して奈落の暗きに落つるセータンの耳を切る地獄の風は我！」
『虞美人草』（1907）夏目漱石P357
- ④「吉原は彼等の常に夢みている天国である。そしてその天国の莊嚴が、幾分かお邸の

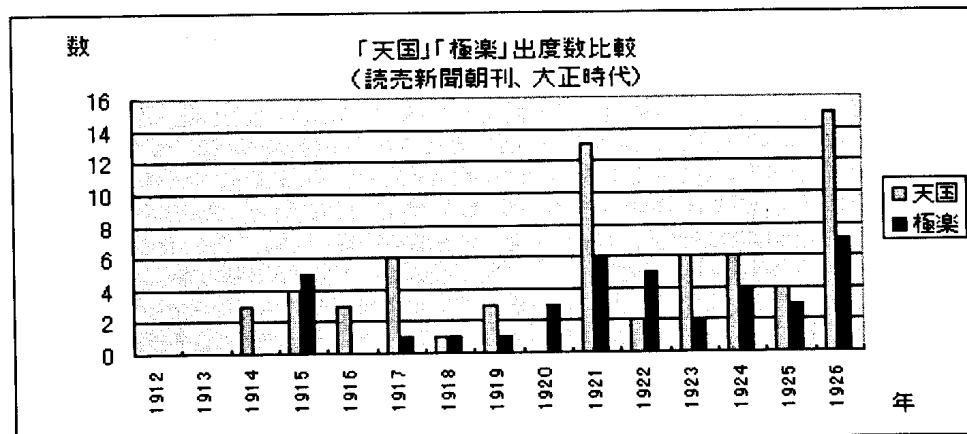
力で保たれているということである」『キタ・セクスアリス』（1902）森鷗外P42

4.3 大正期における「天国」

大正期になると「天堂」の用例は新聞、書物ともに各1例をみるのみである。「浄土」は新聞22例のうち「婦人浄土会」「浄土三部経」などの固有名を除くと14例、文学作品では倉田百三（1916）『出家とその弟子』の8例を始めすべて「阿弥陀の住む場所」を指して使われている。「極楽」は新聞では明治時代とほぼ同数であるが、「天国」は1例から66例に増加する。出土数経過を年別に表すと(図1)(図2)のようになる。



(図1)



(図2)

大正時代最初の「天国」という言葉は1914年（大正3）4月5日「逝けるハイゼ」の記事の中でハイゼの長編小説のタイトル「天国で」として出現する。その後、昭和5、6年頃までは、映画や演劇などの題目に「天国」という言葉が多く採用されている。用例の分類をすると、

①宗教的意味合いの強いもの

「大弥散聖祭—其の神秘荘嚴の光景は坐に天国の出現を想はしむ」（大正5）2月7日

「天国にて良き御業を与へ 夫婦心中哀話」（大正8）7月18日

「お父さんは天国よ 河村五六氏が可憐な遺児」（大正12）2月25日

②宗教的要素の薄いもの

「海鳥の天国」(大正8) 7月10日

「日本は軍閥の天国」(大正10) 11月22日

「養蚕の理想郷-天国の様な沖縄」(大正14) 10月16日

「銀座の高層に 子供の天国」(大正15) 1月24日

③その他

「家庭は此の世からなる天国ださうですが、僕は天国になったり、地獄になったりするものだらうと思ひます」(大正4) 5月8日

「面白い新遊戯 天国と地獄とを一枚の紙で示す」(大正6) 5月8日

④映画、演劇などの表題

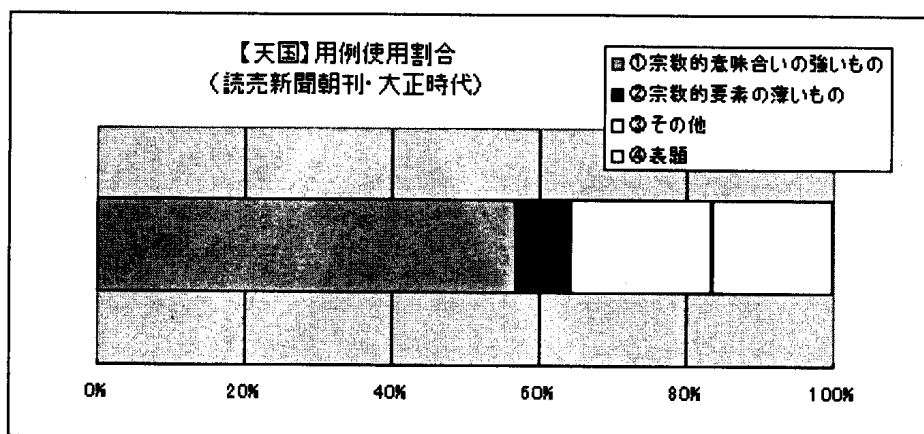
「ダンテ神曲 全訳詳注 天国篇」(大正6) 4月13日

「松竹キネマ 天国牧場」(大正10) 2月25日

「心理象徴劇 天国への道」(大正10) 3月24日

「漫画喜劇 地獄へ 第二幕 天国と地獄」(大正15) 4月30日

と、大きく四つに分けられる。③その他には、①②の区別の難しいもの、地獄の対義語として用いられているものを含めた。なお、表題として紙面に掲載される回数が多いことから④の項を加えた。用例の使用割合を表に表すと(図3)になる。



(図3)

①宗教的意味合いの強いものには、キリスト教を特定するものの他、心中事件や情死などの記事で死後の世界を表現する語として「極楽」に混じって「天国」が併用されるようになった。また、②宗教的要素の薄いものでは、「海鳥の天国」「軍閥の天国」「子供の天国」などで見出しに用いられているものが目立つ。

文学作品では大正期も明治期同様に、比喩的表現として用いられることが多い。

「天国」の用例

①「はらいそ(天国)の門へはいるのは、もう一息の辛抱である」『おぎん』(1922) 芥

川龍之介P244

- ②「この世を忽ち天国とも観じる楽天家の彼だった」『多情仏心』(1923) 里見狩P358
- ③「夢の中に天国の門を見たそうである」『猿蟹合戦』(1923) 芥川龍之介P81
- ④「肉の欲念が葉子の心を全く暗くしてしまった。天国か地獄か、それは知らない。」
『或る女』(1919) 有島武郎P760

大正期に刊行された辞書では、「天国」の語義は宗教的語義の解説にとどまり、「天堂」からは「耶蘇教の語」という説明が消えている。

『大字典』(1917) 上田万年他

【天国】耶蘇教にて信者の靈魂の赴く所、即ち天帝のすみ給ふ清浄無垢の天にある想像世界。

【天堂】一、神のいます天上の殿堂。

二、(佛) 極楽世界。

【浄土】(佛) 清浄なる世界。佛の居所という地。ごくらく。極楽浄土。

【極楽】一、楽しみをつくすこと。

二、(佛) 阿弥陀佛の居所。蓮華を世界とし諸事備はり円満安樂の所にして、佛果を得たる者の往生すと称する所。

『字源』(1923) 簡野道明

【天国】天上のくに。耶蘇教にて罪を贖はれし人の靈魂が死後に行くといふ。天上界＝天堂。

【天堂】佛、極楽世界。

【浄土】[佛]三毒五濁の業なき清浄なる国土。人界を穢土といふの対。

【極楽】一、たのしみをきはめ尽くす。

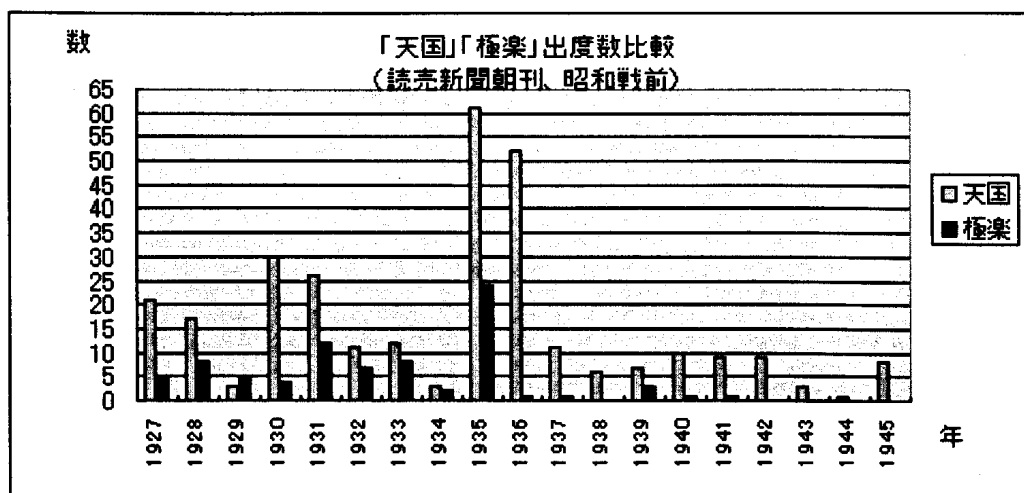
二、[佛] 阿弥陀佛の居る所の国にてきはめてたのしき処、佛家の理想の世界。

4.4 昭和期における「天国」

「天堂」は新聞、文学ともに用例が無い。新聞で「浄土」の用例が143例と増加しているが、1928年(昭和10)12月7日から1929年(昭和11)年3月19日の長期に亘り連載された「観照浄土」での用例が104例、1935年2月の連載「実在の浄土」16例、1936年6月連載「親鸞教の時代性」7例、計127例が連載での使用であり、語義の変化はない。

大正時代に引き続き「天国」「極楽」の出土数の経過をみると(図4)のように、紙

面から「極楽」が次第に姿を消し、「天国」が定着した様子が窺える。



(図4)

1935年(昭和10)に「天国」の出土数が多いのは読売新聞社主催「菊花天国」が9月1日から11月末まで開催され、

「繚乱「菊花天国」にスター顔負け」

「絢爛薫る！菊花天国 きのうの入園者記録8万人」

「菊花天国 福引 大当たり醤油1樽！空籤なしの豪華賞」

など、61例中「菊花天国」の語が31例を占め、1936年(大正11)も同様に春の「つつじ天国」秋の「菊花天国」による催事が紙面を飾り、出土数が伸びた。

自殺や心中事件の見出しでは

「天国への恋の道行 松井博士の令息心中」(昭和7) 5月15日

「処女のまま天国へ行きたい 荒川で自殺の娘」(昭和7) 7月25日

「女子専生と工員天国慕う 稚児ヶ淵で取り押さえられる」(昭和8) 9月9日

「青年団長と芸奴 ボートで天国へ 遺書一通大森沖に消ゆ」(昭和10) 5月5日

「天国を求めて痴漢に遭う 家出女中さんの災難」(昭和10) 7月8日

「薄給の嘆き 夫婦愛を天国へ」(昭和11) 6月6日

「肉体美人心中 幸福な天国へ」(昭和11) 6月10日

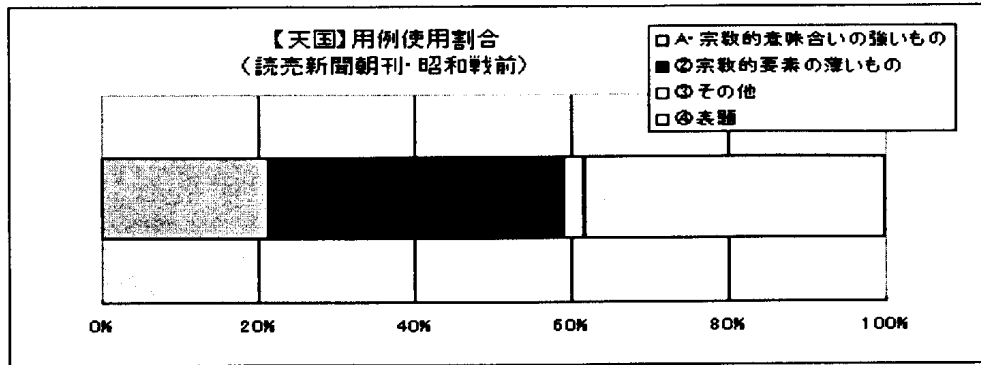
「愛人の面影を懐に天国へ 会社員の自殺」(昭和11) 12月25日

「美人女性と受験生 天国を慕うて服毒 網島心中」(昭和12) 2月3日

「デパートに結ぶご法度の恋 天国慕うて三原山へ」(昭和12) 6月8日

「天国への乾杯 カフェで勘当の運転手“青”自殺」(昭和12) 7月26日

等々、「極楽」に替わり「天国」を使用することが定着した。これは死後の幸福な世界をイメージする意味でも使用されているが、①宗教的意味合いの強いものに含めた。語義分類の割合は(図5)のようになる。



(図5)

大正時代(図3)と比較すると、①宗教的意味合いの強いものが半減し、②宗教的要素の薄いものが4倍程の増加となっている。③その他の暫定的なものが②に移行したためであると推測する。

また、大正時代では66例中2例のみであった複合語が「女性天国」「友愛天国」「恋愛天国」「敬老天国」「健康天国」「納涼天国」「ルンペン天国」「プロ天国」「青空天国」「お砂場天国」「ブランコ天国」「銀幕天国」「赤ちゃん天国」「子供天国」「男天国」「帆船天国」など、147例に増加しており、その造語力の旺盛さも「天国」から宗教的要素が薄らぎ、楽しく理想的な世界のイメージを定着させた要因の一つであると考えられる。文学作品では「浄土」「極楽」「天国」とともに明治時代から使用変化はみられない。

最後に『広辞苑』初版から現行の第五版までに「天国」の説明がどのように変化しているかを紹介する。

『広辞苑』(1955) 初版

【天国】(The kingdom of heaven) 神・天使などがいて清浄なものと伝えられる仮説的天上の理想境。キリスト教では信者の靈魂が永久の祝福をうける場所をいう。天堂。神の国。

『広辞苑』(1976) 第二版補訂版

【天国】(The kingdom of heaven) 神・天使などがいて清浄なものとされる天上の理想の世界。キリスト教では信者の靈魂が永久の祝福をうける場所をいう。天堂。神の国。転じて、苦難のない楽園。⇔地獄。

『広辞苑』(1983) 第三版 第二版に同じ

『広辞苑』(1991) 第四版

【天国】(The kingdom of heaven)

① 神・天使などがいて清浄なものとされる天上の理想の世界。キリスト教では信者の靈魂が永久の祝福をうける場所をいう。天堂。神の国。転じて、苦難のない楽園。⇔地獄。

②比喩的に、心配や苦しみのない理想的な世界。「子供の天国」「歩行者天国」
『広辞苑』(1998) 第五版 第四版に同じ

1955年(昭和30)初版では、大正時代に刊行された他の辞書と同じく、語義の項目は一つである。1976年(昭和51)第二版補訂版に「転じて、苦難のない楽園。⇔地獄。」という説明が加わり、1991年(平成3年)第四版から「比喩的に、心配や苦しみのない理想的な世界。」「子供の天国」「歩行者天国」の解説が付加されている。

5 おわりに

「天国」は、孫(2004)が考察したように漢訳聖書ですでに用いられていたことばをそのまま受け入れたもので、1873年へボン訳『新約聖書馬太傳』が初出と思われる。聖書の訳語として紹介されたのを発端に幸田露伴、尾崎紅葉、永井荷風、夏目漱石、二葉亭四迷、生田葵山、森鷗外らにより明治期の文学作品にいち早く取り入れられた。作品で用例数を比較すると「極楽」の使用例と同数が確認できる。

明治時代の新聞では1例しか用例のなかった「天国」は大正時代になって「極楽」を上回る出土数を数え、広く一般に普及浸透していった。そして、昭和戦前には「女性天国」「ルンペン天国」「お砂場天国」「ブランコ天国」「菊花天国」「つつじ天国」などの、本来の意味から派生する比喩的な語意での使い方が定着していった。

「天国」という新しい訳語が聖書で紹介された時、辞書においては「天堂」の語義に混乱が現れ、『当世書生气質』(1885-86)にも「耶蘇が天堂から来臨なし」と「天国」と混用されているように思われる例が存するが、大正時代になり「天国」の定着に伴い「天堂」の語義も定着した。また、「浄土」については新聞、文学作品ともに、浄土宗や浄土真宗などの特定の場面での使用が大半を占めている。

「天堂」「浄土」が「神仏、阿弥陀の住む場所」という一義的語義での使用が主であるのに対し、「極楽」は「きわめて安楽な場所や境遇」という二義的な意味での使用が一般化しており、「天国」は「極楽」と同義的な使い方がされたことにより、二義的な語意の定着が進んだと考える。その主な要因として、①聖書で用いられた「天国」の本来の語意が浸透する前に「極楽」との明確な区別のされないまま文学作品で使用されたこと、②新聞において死後の世界を表現していた「極楽」が「天国」に替わったこと、また、③「天国の様な沖繩」「天国の如し」などと、宗教的語意を含みながら用いられていた「天国」が、その造語力の旺盛さにより「青空天国」「健康天国」などの複合語を作ることにより宗教的要素が取り除かれていったこと、などが挙げられる。なお、大

正末期から昭和初期にかけて出度数の二割から四割を占めた「第七天国」「浮気天国」などの映画や演劇の表題に使用されたことによる影響も見逃せない。

1987年（昭和62）、聖書の改訳に伴い発信源となった聖書から「天国」という言葉は消えた。^(注23)しかし、「天国」は文学作品や新聞などを通して広く一般に知れ渡り、最初の語義から派生した比喩的表現の語として不動の地位を獲得し、現代に生き残ったと考察する。

注記

- (注1)『字源』1923 簡野道明編 角川書店
- (注2)『現代国語辞典』1989 市川孝他編 三省堂
- (注3)「近代日本における漢訳聖書の受容—「天国」という言葉の受け入れを巡って—」
『京都府立大学学術報告 人文・社会』孫遜 2004
- (注4)『Interlinear Greek—English New Testament KIG JAMES VERSION』189
7 Baker Books Co.
- (注5)『THE GREEK NEW TESTAMENT』KING JAMES VERSOIN 1897
- (注6)『新約聖書馬太傳』1873 J.C.ヘボン訳 近代邦訳聖書集成④1996ゆまに書房
- (注7)『S・Rブラウン書簡集』1965日本基督教団出版局 P 228
- (注8)『ヘボン著和英語林集成』2000 飛田良文他編 港の人
- (注9)『邦訳日葡辞書』1980土井忠生他編 岩波書店
- (注10)『邦訳日葡辞書』1980土井忠生他編 岩波書店 p5
- (注11)『どちりなきしたん』1950 海老澤有道校注 岩波書店
- (注12)『スピリツアル修行』1994 海老澤有道編 教文館
- (注13)「こんてむつすむん地」『吉利支丹文学集上』1973 新村出他校注 朝日新聞社
- (注14)『新遺詔書 I 馬竇書他』1813 ロバート・モリソン訳 1999 ゆまに書房
- (注15)『新約全書』1863 ブリッチマン、カルバートソン訳 1999 ゆまに書房
- (注16)『摩太福音書』1871 ジョナサン・ゴープル訳 1999 ゆまに書房
- (注17)『聖書 新共同訳』2002 日本聖書協会
- (注18)『聖書 新改訳』1970 いのちのことば社
- (注19) 読売新聞朝刊1875（明治8）年1月1日—1945（昭和20）12月31日
- (注20)『新潮文庫 明治の文豪』1997 新潮社
- (注21)『新潮文庫 大正の文豪』1997 新潮社
- (注22)『新潮文庫の100冊』1995 新潮社
- (注23)『聖書 新共同訳』1987 日本聖書協会